

翹楚編

全



又伊 6

3161



又伊 6
3.161

翹楚篇序

太華翁之翹楚篇者，餐霞館之起居注也。曹劌曰：君舉必書，書而不法，後嗣何觀？人君之言動，書以為則者，三代之遺直也。夫經國之業，為可法為可繼者，君之分也。君有善不朽之後世者，臣之職也。文思恭儉如老矣而無載之，而遺後嗣子孫者，誰辜乎？翁少壯而好古厚學，嘗為中庶子，拾其遺補其闕者有年，熟其起居者誰如翁乎？翁之此舉也，可謂不畔矣。簡也庸愚，謬

王先謙

水戶青
山氏藏

明治四十三年九月二十八日
成購

蒙 老侯殊遇亦為翁所推以忘年之交
及合一叙寧可以媿辭乎寧可以媿辭乎
寬政庚戌孟秋

本藩提學神保間拜書於興讓館中

朝楚篇叙

自古之法言法行凡人君之旦夕誦習所以
鑑戒者載籍靡然至其義通融施之
行事則期之老成豈得遽望之於少主幼
君哉且人恒疎乎遠而密乎近其近而密
者誰如父兄師友也源士雲條記
鷹山老侯為君之德以進之 世子其意
欲不必求之遠而近摸放之目前
祖侯之所為也先有烏度篇以獻于
公尋作政語獻于 世子今亦進此書士

雲之於忠蓋其性之自然矣初余當
老侯之為世子時承乏賓師之次以故自
其襲封為君至遜位營免喪親仰其仁明
二十有餘年既而余就任于本國然亦間
年樞承于今侯于東都之邸者猶
老侯在位之時焉故每聞其所言行日益
多矣况於親信左右夙夜之者乎士雲名
以翻楚六列其十一之謂耳余嘗竊欲有
此篇而非外臣之所可敢為也今見士雲
之所錄實適我願為題其首以還之尾張

國枝督學子細井德民撰

翻楚篇序

臣鵬嘗刈楚

不識古以下世之先君之嘉言善行名曰翻楚然奕世之久行變之多未能畢其業今年世子出就外舍老古謹庭訓誡牆面師傳保以之原左右前後之書遇徹膳進善放諫無一不備可謂盡矣蓋子之於父無不謂吾父仁無不謂吾父智况老古之仁智而世子之孝順乎傳曰孝者

と稱する事あり御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり
居飛極より上りたり御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり
二人より居飛極より上りたり御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり
稱する事あり御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり

引移すべく明和四年重建し隠居せりて此迄四年十七
少く立御家と云ふ事あり御立位十九年御家三十九
五中して天明五年没せり力以下妻の世隠と三九御
居小位御家の事あり

一 乙乃世子少く居候事あり時或目馬場、出く賣る事
あり或時子御自的但交替の者極田中居浦に居り也
其内何といふ事もや今年始く江戸におく者あり

事々不案内少くる物と云ふ事あり御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり
人々此して近ぬえより不案内の者あり御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり
此より見れば諸士居小位乃垣の内不入て身を隠せりて
久委待せり御賣るの止さる事あり何事なき事あり
此より見れば垣の事少く小便せり侍傳の諸士居見
付く此中江人車を隠せり事あり公の御年に達し
りもや諸士を願ふ事あり御賣ると云ふ事あり
御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり
御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり
御家少く尚之を稱して居飛極より上りたり

一 世子少く居候事あり時侍傳某精進の朝餉代依り

しあしを執る小腕中芋の子に急乃鱗一片にめてあり
進んで好見付るといふれ人ふと志すれ 云竊小知
免一芋をたふして鱗と隠るるひ

一 世子小くはるる時侍臣新藤原の日に阿るる
得く忍火と逢ふ事とて例小侍る者忍火此由と
告且進も者乃不敬と責るるに 云すはく此炭
とといふ成るひある火をまつて 製るる路るを
宜しく候へて不敬と責給ふを

一 世子にてまはるる時玉氏の困窮を少召給ふ路
ひは禮く世を法ひし時と居るに此候ありは
多氏の一助あり成るるとの給るる 世を法ひ
ひし 小も果して其由云々のとく 部在臣御
仕切料のま 終小計百九の一合何程少く内自之の
内報名は是るひし也

一 云まてく 多智るひし 時の事あり 御花之の通
迫幣一八實も尤の事あり 其昔裁書を依るひし
此をそはるるをあるとて 女程ありと 百計指する
令借小稱もひし 亦三十万石に減して米はも移
るひし 夫より上も才減して十五万石を知りて 是れ
君ハ之より 大玉乃 君臣ハ 木のく 大玉の 束るるハ

君臣共小むしと云ふ人情其積し格も分に
越し最棒録を其時に減るれ大小の志士
凡五千家小近く其を福を包計せし十一二月
小と至ぬし唯夫の治平の久しきに其格
そ式乃と次第く小大く成身しきに救十
百乃の費を臨くつし其事より其年の首を
以くそ年の用に足るくもあは出入高ぶる者
小は手と下され利息金息海を費しし事玉
しより御國政し心はあはぬる事あり
ぬ尚し漸く乃衰ありあつるれ百姓の難は

御家の危急も云ふ事と此のゆゑに
免ゆる御家督乃始か御膳ハ一汁一菜と
付し免御服ハ木綿石帯は是を日南乃徳
竹と御出はしり凡人情始りし氣を
能後何れ少るなる成小御立位十九年
今既流れりて之其儉をせぬ以て即
猶ハ一廿束小限里御振ハ下召と小本綿と云
也一云里

一 云學子曰と好まぬを以平海先生姓記名臣氏字と世馨と云
平海と号し俗号と御井長生
と云南時尾徳の事とて江戸に位
し今今を以て尾徳家の儒に
鶴其生姓記名長生字弥
八鶴其生と号し俗名

一 乙卯く入部す。萬曆一十年より氏の辛苦成る。其
 為亦八日千に記す。其ふ田畠印流の爲に後絶
 る物多し。印野遊の由唱まぐ度。野間へ出て耕作
 の辛苦を更なれ。或ハ氏亦ふやまの何れに物語杯
 志すひても。そのひ。常のゆ也。安永六年九月
 十九日のゆ。印野の山門へ。姫事して甚し。一
 百と云。故を問ハ約束。一。と。刈餅刈餅とハ農家
刈餅と刈餅をて。祀と九月廿九日。
小門を解つて。と云ふと云ふ。と。然るると云され。山門く
 滞る。くる。印野へ。出く。福田餅刈餅の名付て。フ。モナト
ハ福田の異名。一。芭に大豆粉。一包を。出。ぬ。故を。問ハ

印門く。かく。答。一。忘。く。の。と。一。木。の。く。あ。や。と
 心。以。る。と。一。由。言。上。及。ま。れ。ハ。初。ハ。殊。縁。の。ゆ。に。疾。く
 披。垂。れ。ま。よ。の。印。意。少。し。印。上。印。飯。酒。の。ゆ。に。南
 阿。金子。ふ。と。孫。く。厚。く。謝。して。帰。り。の。ひ。に。あ。り
 其。取。と。推。る。に。印。野。君。の。時。夕。に。く。の。ゆ。也。と
 考。へ。姫。の。い。そ。う。く。稻。丸。他。色。居。ると。は。流。し。多。事
 流。士。の。挽。して。は。こ。つ。と。特。運。し。た。他。色。手。傳。ハ。勢
 力。以。て。此。稻。丸。何。来。る。と。問。答。の。ひ。に。一。餅。米。と
 答。へ。ま。り。一。餅。手。傳。を。れ。ハ。一。餅。の。名。付。て。餅。を
 今。に。ま。り。一。餅。と。我。れ。を。以。て。乃。阿。と。と。云。と。

御城下は百姓町人の代官ふら百をふす御成
阿つて逢せしむあり御城に免されしは御仲
の間にしむ免され御座の間へ百て逢せしむ
ふと御父重定と御二のるより列座せしむを合
御四の間にしむは百姓は合を御怒し御意
たり程は三の間へあり勢を以何と御親しむ間
為ありふら時取なり重定より合子ありを
は席を御料理給り此時も候まを以は常里の
はさ御怒あり御前とくしむを九板の帝にたり
ぬ板との御前より子とくの内附副将を文と

市料理板假^配乃給仕し子とくはとくへしと乃
は事より或は子或は孫或は娘或は姪にのく二三を附
副せて帝のより給仕し親しむは御親しむは
此は席に侍りて親しく見し人より及一之間
を教人ともをいあんを合を告れ父母は能事由
はれと既往を悔し未来を悔し心苦くぬあり
されはふら悔ま給り御彼子とく給仕し事
由あり板の志目しむ謀ふる實しをを告ん
子とくは新まてあり免定を父母より告り之人事
彼よりとくありむれ者不彼子とくつらも教あり

い川の御能いつのち離子すし御とつゝのち仕取ると
いふもいふもいふも或時なるは給ひし新まてを
く路のいし事ふくく 乙の御嫌ひして備へて
とろくハ御心のまににありあくも何れ路のふ
南山 南山彼ハ重定ト申候及の御号請鐘ふる山と云
不審不崩とある事と云く名はけられ 乃御妻不審
不崩といふハ御御年の御樂只此能り志くハ
何れ路のふく 乙其はおとろくも何れもなれ殊に
御心の候も御樂も備へる久とて重定ハ能りも
離子すもいふも御とつゝ御仕取ふされハ此ハ御能
の度毎ハ先御とつゝ 稽古ハいふと云く上代

重定おふえせし事と路られぬ御とつゝ重定ハ
も亦係と御合のありぬる

一 乙に戸小丘とつゝ時の事多し 全別三高 毎よりも
親の上達も浅く後して志百は路のいし 又上
限みましつてより今安永七年と十二年あり其十二
年の間ハたのつゝ御親言も上達ましゆやく三高ハ
さて上道路る親言も又たゆハまくれ自をハ此高
三高と下して御能ハおしまりをきんハ何のち
樂ハ是れと云ふハ門才二三人も連下と云との御
親とて下して御能ハありぬり 八月始より十月
迄ハめよぬと云

一 離拜卷ハ御本九ノありし是レ後久ク大御為之年
ふとられた字の苦悩ありし時、此レ能ク心は伊也
のふまじ地事と名付天の二年 御隠居御指の内へ新
小籠拜卷と建をくせし

一 重宝云御隠居の御意ハ深山也此の内もふも
ふくし御指の度多れハ猶も心と兼しこくおるを
ともし重宝御意の中形も御意ハ御費志結久し乃
此をともふし免せし 是レ亦難し心はとせける
云間一御意を自の御意何々そふ色(す)何の内遠
高より及むぬらん此のまに深きとを較多の

人足とをくせし 是レ心の内小法をぬし

一 い川の事成し、二十年ハ忘れぬに戸上をせし時のふん
云御意ハ是れハ度、御招請をくれ御意と
をくく入す小御留之年ハ悟ノ統統よしとく榮う
る(一)後何^{御未宗}後^{縁承} ころの上ハ定て時折其の招請
ハ其(を)れとふ如之の後何^後何^後ハ石時の御意
此しふまでには申く用人の取置をたてあうしん定ま
る招請のとは事、交答意あくハ度、乃御入
も御痛と相御 ぬえん怪しきもふる^後をて御葉
内ハ上花の日月此夕(夏)の御涼、冬の内徒然

と御慰め申さるる為内々言後何處に御申
申留お取お取心もやと大反標の仕様を
しるべきし亦此氣をいしく心道なき人必し
或子尚中せし事の流弊をぬ標能く九を能く
河津後何處に御申人申す事申合てこそお慰の手尚中申と意
ハ留しるハ心道の志くくと申申すハ合めて申
尚の金子後也

一 予々書さる此歎小取く赤名を出る事何とやん
赤と錯るよ似く人の下墨もやと思せと知くは
論もなるし知まると福をんし亦思れ能あれは

愛ふ御里侍る 云御原故かこれ後のまに申すも
好ましく福は根更常とら孝養の事よの御心を
のけしより能離子或ハ仕弁屋しるをたをいつも
教書の御おとよ一或時を改るし時のい意よ
物を来ハ淡のち又事之近次の御離子く其之ハ又
事何日の仕弁屋し自から勤ら書教の多き小車
丸反勤やと書教ハ亦多し自から勤らと丸反勤
互らのと取合しる教十書と是人とそれ相し障のふ
又との併是式慰しそよの勤もそ存りも謂
是福と此御おとよ慰められハしてのふ孝養相し

上りて申す。然る是全く知年の時教てくわし。小倉
姓ハ黒金御知年の時の古姓ハ底ありと云く。今又云ふ。志
中く仕為況をたまふしよ。
相白多そと云ふ。路きるハ。諫又難を御意ありし
所也ハ。思多くハ。存あり。好く。此時予ハ御答小彼
底と相不ハ。付多ふ。彼身不なく。本懐の至る
所を相白ハ。つせなり。ると。疾直てハ。謝詞ハ。言を
ぬ。弱ハ。下ハ。ぬ。り。する。貴不。跡。時。と。傳。し。人。命。の
定。る。き。也。ぬ。ハ。一。體。て。謝。せ。ん。と。云。言。間。ハ。其。事。の。事。
一。然。玉。と。ハ。悔。多。路。の。余。返。さ。し。ぬ。と。申。上。り。し
ハ。諫。又。後。を。多。ふ。り。流。り。し。こと。と。相。し。そ。よ。ふ。ハ。や。ら
疾。呼。て。謝。せ。し。一。也。の。御。意。あり。し。予。も。ぬ。ハ。降。旗。在
目。も。ぬ。ハ。招。れ。し。事。ハ。御。意。ハ。甚。に。悔。し。ぬ。事。も。と
多。あり。其。容。直。す。あり。ん。比。差。就。了。御。用。何。ハ。御。意
至。く。正。し。し。の。云。沃。小。く。山。岸。赤。御。御。意。あり。し。予
ハ。例。ハ。甘。路。も。し。下。る。の。言。軟。を。と。予。ハ。耳。又。口。押。あ。そ
黒。金。ハ。本。室。の。ゆ。に。彼。を。召。す。所。を。申。す。と。い。ふ。も。を
其。時。在。し。と。謂。は。れ。何。ハ。の。ゆ。を。と。志。ぬ。奴。奴。ハ。若
き。し。ハ。小。赤。御。若。く。小。赤。御。と。言。出。せ。相。儀。出。し。ま。し。の
御。意。し。し。志。く。の。御。咄。あり。早。く。謝。せ。し。の。と。云。奉。
ハ。教。し。ぬ。の。御。意。成。し。ぬ。奴。奴。の。面。悟。文。と。若。

疾呼て謝せし一也の御意ありし予もぬハ降旗在
目もぬハ招れし事ハ御意ハ甚に悔しぬ事も
多あり其容直すありん比差就了御用何ハ御意
至く正ししの云沃小く山岸赤御御意ありし予
ハ例ハ甘路もし下るの言軟をと予ハ耳又口押あそ
黒金ハ本室のゆに彼を召す所を申すといふもを
其時在しと謂はれ何ハのゆをと志ぬ奴奴ハ若
きしハ小赤御若く小赤御と言出せ相儀出しまし
の御意しし志くの御咄あり早く謝せしのと云奉
ハ教しぬの御意成しぬ奴奴の面悟文と若

—これハ予々たぢやうの心付言そら—と云ふは伝ふ
書記はしり 聖王の御代にありし御事ありは傳ふ
小素々聞きしん小又少御代ありは傳ふと傳ふの言を
し疎小しなれ御代亦彼らに傳ふと云ひせ—
心の書し御代亦傳ふの言を彼らに傳ふと云ひせ—
はくや—め浅くぬ—事—四の御代傳ふの言を
已の徳をうきくを傳ふ—徳人の徳ありは傳ふ—
理りてその伝を記しぬ

一 御先君御代に孝子御貴言ふされし事ハ三教奉
て昇ふ—と云ふ—云の御代傳ふ十九年乃間

孝子或は妾物の者貴言ふ—と云ふ事凡ハ十五人孝子
不置永賜爾類と云 云の孝子ありは傳ふはこれ
事ハ御世治の厚なりし事ハ亦形ハ多しし也
一 何れもこの御代傳ふの事ハ記ふいと多しは内一二
事ハ傳ふといし御代許事あり死刑行ふ日ハそふ
や及—と云ふ御代許事ありは傳ふはこれ
しむて事ありハ不足不す—と云ふ事ハ傳ふはこれ
らぬと云ふて事ありは傳ふはこれ
ハ江戸御代傳ふの事ハ傳ふはこれ
御代の人民ハ既危うし目と云ふ—と云ふ 云御代傳ふ

侍して勤る志のありと宣へて切のち教寸終よ
許しなはさうし

一 大徳新まに付御立位中にも三時のち徳も直まき
きうめりし 乙上面よりし 世子顯孝云
偶くけて例ふししひ引りて下に 杖翠乃
ち方侍すしるへく顯孝ち印年のるるれハ杖翠
のちち梅の幸れとち好まてまやと宣へるる
杖翠のちち若ふして辛甘の好悪ある侍れと
甘よくて辛くは後へれた杖と是へ侍ると云
しに亦るへ向しれ 印あは甘とち好くと存上

ちと御御ありし時 乙答よりして印何と
たうち少や膳部人の指く出せるハいれは梅梅能
是く侍ると宣へり

一 天明三年三月の事 世子顯孝云の御宣う杖
土佐守豊雍のち娘 米姫君と御縁約あり始く
土佐ち招請の時表ち生妻ち祝のち容 意も既
聞よ及これハ追付ち徳ちち産 處ハ福も助もふ下
ち徳ちち容 意の物教如侍し ち中と御膳部の
兼沼友四郎ち信部の高持を侍るるち
夫ちち就まよ向しく調へこれハち徳ちち産付の

始に依りて事々御餅菓子御用意落ふりた
り御座不役人の中に出ふ然立書として菓子也
一戸付を何と事々やれり付さ
ハ御書示の不調法不止と云御膳部の中出る
従令の座示のる邊あれとて然立書ハ全く此後
部の大なるれハ度と云示さる可及を形を
のる邊不調法ハ早急の如ハ御膳部の不調法
不止と云此時在御座不止と格致今と云
今不調法の中出りハ先によすハ多人数を
出し近所の菓子屋に納候餅菓子の品ハ

上よと内と撰り其お意もあると云ふはて敷
人を出して唯々各あり御餅菓子持て敷汗
の菓子屋に集り然れハ念子ハ念子入て其不調
ハ菓子組あれ安永十年三月御座中振書あり
時干菓子組として御座の菓子組之其出書
乃菓子不可有少あり止りて彼と云を
此今それハ不と云れハ可也ハ此間のうるぬ
事ハありぬかハ事ハ在御座と云と云
之事ハ御座ハのる邊あり若急り止りるれハ
是ハの品と従令と云上ハ菓子組書立
と云ハハ之様ハく物と云ハ人ハのさるハ

名子のよのこ前より若きや菓子能くくして又
沈黙の能くくとわくまに答のいし程よ夫い
ふ調法を記たれ御叱し及そ海し

一 天明六年九月八日將軍家治右御他界あつて御
院号を 儀的院殿と稱せられたる月の八日く
小を終日精進の御膳まゝとてふすし御御出
立道了に或る八日於ち猶よ夏の時料理して進を
御大陰中ら夏よくたし之を御膳取ら猶よの重
ろく女中の給仕るしよし何の心なく進年せう
しに凡のゆ久しくゆうに事なる遠ふるしる

きものぬよ近よ此のゆふく遠ふよのあると
誰しものれぬ常也くふを 儀的院標の御忌日
ま六精進小波まよおと給は何とくしるゆりや
未い合言しるし殊仕をの書るゆあを守り毫も
入られまよ終へてくしを仕合ありたるとを
若くく人連もや教くと波まよの 御意にく
御表(出さるゆい)あり吉ハハの御膳取役を
由井原就といへる者あり初る大御誤也唯忌
入のまけ程のふ調法を身の御膳の包丁忌
いも也疾目役へお譲よと配取へ祈り裁許と待

何事の如く其れは汝が知ると煙草を柔和と好ぶ
何と云ふ事やを来ハ次第く不強むまを出せ
故たとハ二服吾人変一服吾五服吾(支)成やうく
少くして二服も吾く居り也其ハ九時くといふ人と
其れも亦考ふたにまをくといふまぬ(支)とありと
いふ人ハまを考ふると動かしめて居るに
汝が自作の柔和なれハ新ハあまると言ふに
以清中て返ぬ相ハ煙草目ら吾の新と吾難ク思ふ
と知らまへせよ其れはのまを考ふるに(返)ては
のまを考ふるにハ煙草の量ハあまると茶道のやく

ありハ軟きを以て竹筒長有る吾人ハ煙草を思入るに
柔和向用ありとハあまると強向よりまを考ふ
あり柔和向り能くもこる考れハがハ強向如と
考へにありまを考ふの御意なるハ然らハこま
ハ強向より強向の比ハと悦びく次ハまを考ふ
煙草亦も次ハまを考ふ亦強向漸く次第くハ強
向と考ふに逆ハ法ハと何れ御意の下
ら強向より強向の比ハと悦びく次ハまを考ふ
考へて白ハあまると煙草を考ふるに物に
はとありて百とれハとハまを考ふるに

のち和哥と下しぬくぬ押載と相伝され

治世教印代のききえしむとされ乃

ふのききえしむとされ乃

とあへる程と御書語りてこれに相伝目録を御
規式とハなるぬ

一 常しのち物語は歎と物と種々に申く志向し
と深あり下し目士の増物し新有下し下記不
別事の備足ありぬまあし福とし善くし災を
ちる不致増し進して其心を以の痛入亦お恵
の授けしうねとふやう常々苦しみ心よをそ

安くし御言釣魚二三と持事り或は某國の品摘
事して自作の品と言ひ釣得しうあといひく
増進れよを實し其人の生い実たはし願く進く
志向し新し不とそ挨拶の如きを人々あり
福れ苦しみようも福れありしれくしおめを
安んず然るに能ふしよと安んず福れく増れるハ
上と致する誹り其心とをせむに在遠しる者
れれ其心をせし申く入てあしぬく凡の人情
ふふ修めよふ心はし心はし但もぬふ然し言乃
是くぬまのこも能ふ取持く増進するハ文が己ら

及つふあしは

一 三し卯丸の隠岐の古庭よさくら木多くあり
花の昔より御父重宝と始めまつりせり高き
花の宴進免のひ掛り日よ宮内少輔一奉教
主の掛りるく前宮侍りしりてなり長後ふ阿の若
しと侍りしりて隠岐せりしもの又今官位し
降るもの老いする父ると阿の院にけり此列傳の也
くくもくさくらありるさしめたり又三月三日
ら三つくは庭の曲水は陰まをひ詩文ふきつさ
りそ古おもをり降るものふは曲水の宴を詩りめ

強くさくこ桜うりにふく打むしうりよまの庭
曲水の風流ると皆平小は及難支るん

一 御園ふたをりし時よ老朽く舊種或は多打ふと
古遊遊の支も阿の院と江戸ふくは古庭のふかく只
御座の間小和漢の文と友とりのふのここ 上さ
く歌のゆりれは侍りる老のふはね流は言と晴し
心を慰るといふるに「そむをききく人懐の
常ぬは梅くむしきぬらん梅を友とけり同らん梅は
よにぬ上種花多しし群集をすし桃、桃園牡丹ハ
西ヶ京と藤よハ大友花井戸菊ハ東鴨紅花ハ海晏与

海より小舟は棹を揺りてをばつゝの風流登樓乃
高に月の出のちるをて眺むる彼を比出て
聞ては往く久後外出の宿もあつた時ふ後を以
てはねん情をうりなれりかの天に雲あはれん
明らそを感るる人々さ連立出よと暮夏秋冬
其折旅の程ふは毎日宿をとも保くはあつて
心廣く楽しむる只夫のこゝろふる旅の此程
重なるの酒あふきをると心ひてもあはれぬも
何しと行くもよきあり程ふ者このちりし
を病に事せ夏の花のこの月と度しは程程の

るを進めまつるは何れか帰つての物語きく
こそえらにゆきてお目やうのちるまゝに理程の
はゆはしぬるは年暮れを喜ぶ心は情もあは
の程う者へは御言はまゝに病は具は養生の
看らまはとて予をして登ておはすには押程ホ
のちと程をうりに年暮れの中をそそふん
いう程出るそあつた能くせとのこゝろに
何時何事とのゆははしるるれいふはあつた
よく出ぬは半年あつたの程しつゝあつた
の程のちるをうかまはとてまゝに何事か

名もつゝえん木 ち刀をとるふふあんとそお宿
ふ身をつらうへいさ路るまをいあうへいひ物た
何まての史程中を一急ふ承りてぬといふも
いふ也たあへい一の乳ありそを連て度よのつ
く案一急た内る場は短く表のる場よそ案
事也へ休りてそ定あり底戸あも史と乃役
人或は法人亦ハ路る回る人と人多く出る者取
まをるるるあれとそなれと云物ん
とて此中事も多くとる馬場の東を常と開て
急あ人時引也一主婦さく板板屏を立く

同一木之某三方ハ入る事し明一板屏と引也
さハ屋より内庭も同然あんとそふ時奴のる
一二正を引入るも庭口よりを留の者斗速出く
乗あへい人の右義をも省き物もくも晩まも
あんとそふ時あもくそま富た乳案もそ
者中へくそふ満きうて身をつらふ術もあへい
とそ意ハせぬ 此由具よをせしる年あ流
大よ候以昂時よ作る有り(事せし)に不日り
出りし中あんと請く返ぬ相もふてあへい
おまらまそやあもそん 予哉そく御意よはるく

人の土間小部を又温言の禮以侵さんとの申病より
少く病中 意不仕事あり 麻多に板志うせ下し
ゆひし又去春予々 次瘟病きて既黄泉の客も如
るるしと時し申父重定より病中より看病より
は減らるるし内醫と付人参り以朝夕の飯さへ
公の御病下ぬりて今新筆執て此の書終る
も幸せくめ
今亦往く書る申服とほりしハ 難くもたふしと
いふ身にぬくハ只木をりしと云ふのこ

一 父母の為に戸沼の者ゆま之と看病は減らるる
事申父重定より代明和三年のゆに根田申を

まの將神保化業そ又道業より病言身氣より減
りしし其始りし志れは戸沼の者ハ家より代り
て跡を塞へよ御斗の人かく亦氣を難しとく兵
君子はふるの氣をぬるゆにの常ゆれは從今そ父母
の病候よりすれたのこ危き目とす告哉奴より
看病は減らふと申し亦あり 安永九年七月
のゆに御病高基は在申申は依しては戸沼あり
父手右に煙うぬ病と告身ししに折ししとあれ
友申申し病言して御仕ふ事の時こ殊小此節流石の
病とす近習流各々多とれく大才の不事如

戸の夏々々も同國七取一とよの事申す
昨日母子冥面のらぬなりぬ亦安永七年六月
のゆゑ黄泉に在りて年々と休しそは戸小
五月未母死すの由告すり忘路ふ引籠りけ
節の悲傷見るふ思ふこととそは法今の御位高
御手水當ら小姓一紙連名の祈文とそ忘五十日
の内御玉之にりも夜由在り申す一の申候御以
一事あり其祈文の意を多に書写しぬ在り申
母死すの由告すり孝子の心底痛入る九十年に
そは祖母申すりの病き昔是より心之なき

程ふうる親持くのら扱ふれは少し程心も安
く一に母死しきれは祖母の看病を父の身
の上乃にえなく妻子親親あはれ妻は月とま
懐胎まゝ上小幼年の子多あり病身のを父の態
小沈くの心は一徳を業しけり有極見るふ
絶くはれ忘五十日の間らぬなりんを父を
祖母もあはれ且を父の自當を祖母看病のゆ
かと近族怨念の老小深く我も孝子の心あり
よ安るべき倒るる能るも悲傷の孤子朝夕
尺一寸と思ふるれは能くはれは能くはれは

乳母として長く働きしもの事故乳の色たること
より之後一帯れり而日立て地りく思ひぬ内よ
海府をり

一 仰教は看病師の申例ありと安永九年二
月仰出有て後一人心の候ふ父母妻子の病
ふこと起をせし勅を引く看病師は祖父
祖母兄弟姉妹伯父伯母孫甥姪男等小むては
外は看病人あり又放りくき子初あり伯の
上流屋に任をきり但地帯れ續の者といは
る父母の看病とあり一屆一過とてり一とてか

乃親教は本文の色もる一

一 親教ありといはれき或ハ知少事あり看病師以
し親も亦ハ親教絶てあり小むてハ但今近如朋
友の内中今然ハ看病してをせし事

一 何年の事ありやそは忘れぬ江戸ふたせし
時の事也挑灯男と看病掛くの尺也物有此男下
唇長記生れ少く其唇をよめて鼻ハ一唇ハ面縮
こ鼻隠しそ面短くあり唇をくつせハ帯の面に
あり愛として挑灯の法つ事ありぬくるあり
とて挑灯男とい名付也此之を物時ハ彼より

て後古玉小物入ん小いと馬小字醫早家して

公の御覧心務(祀に件)の志うく伺まひく幣一

能い付くうく汝又付くを彼う幸以也能い

心付くうよく心付くう免も爾も百あまうく心せ

高まつ幣きこれい亦京道古依の御あを為津左京

小(一)御先立某小量つせ看病の為是煙夫附

主近郷の醫師ると我て療治やめ月を僅快

言と得て恙う看病人とた小古玉(一)ちまう進う

聞いけ若生玉敬及の志小く彼竹某うとに言と

して何(一)う扱年字と首る中秘の旅出くは流雲宗
の通判もくを忍てと年まををふ扱年字

の下ふ小物い(一)もの此若うあうう為(一)水銭
あい御城小門の多うにまうし(一)に御城と相
幣(一)と此

一 果田由実も長東の古堂瑞耀院御名
考始云やうなり(一)と

綱憲云彈正次弼と稱し
は林院を賦心と謚なりの御女うく果田由実(一)入

興はま路御方る小れては古堂方此は祖

母とてま(一)ま(一)あ永七年十月古堂七十七うく

飲名ゆひ(一)は古堂の古病きんえあく日小

初五時比入(一)ち(一)れ扱四時或九時比の古帰

ま(一)ち(一)れふあては古場うく終扱の古看病

まはらばぬれぬれと云ふは
口惜ふと云ひて平泣不歎を以て
何やと云ふ故を伺ふも
出く大ぬ極不例の早死怖る急
をいして心之なく存せし程の
いとはあましやと云ふを
形くんと云ふ歎を止まらざる
へ今お談せし何の道少し
汝と云ふ事^{三勝} ^{中例醫}と云ふ
尚うその急も甚なりと云ふ

あはれいしたる也又いふ及ん程
せよと云ふ事ぬ此日十月の十六日
婦も亦御用し有る所の
日の立と極也
追付まんと云ふ事
出く御目見
くせられ官医の内と云ふ事
醫氣の
を告れと父の
くも(早)死して看病し

ぬるまは秋の雉、大高をまき、帯、れ、諸士は、海内、りし
一、天明七年のゆ、こ、六、実、父、長、川、寺、種、東、に、仮、神、あり、ぬ、腫、
物、不、泥、ま、也、強、く、る、事、を、聞、ぬ、ひ、子、也、は、例、可、料、堀、内、馬、
唐、と、登、を、は、附、立、して、時、の、は、振、子、何、れ、も、こ、も、れ、
無、名、の、種、物、雜、治、の、は、症、と、ゆ、を、こ、し、し、り、常、は、是、の、
し、事、と、志、な、つ、る、ま、物、よ、く、讀、ま、せ、れ、公、葉、の、も、と、に、秋、日、
唯、黙、座、ま、し、て、心、を、痛、め、ぬ、る、は、中、に、拙、文、事、
の、形、容、は、ゆ、い、く、ん、へ、お、に、何、れ、も、去、れ、ハ、眼、を、一、年、
し、り、志、願、め、ま、す、ま、し、り、心、ひ、く、四、方、の、氣、色、或、ハ、む、し、
今、の、物、治、る、と、ゆ、ら、に、唯、一、道、の、は、い、く、の、こ、も、愛、ふ、

聞、せ、ぬ、ひ、し、り、ま、強、く、ぬ、ま、や、し、知、り、ぬ、程、あり、雉、は、
痛、ま、せ、し、り、ゆ、の、ま、く、病、の、侵、し、て、故、ハ、帯、の、え、
る、と、恐、る、ぬ、ま、る、ゆ、う、は、お、り、ふ、は、ま、と、怒、め、ぬ、(ふ、と、
強、て、誅、を、も、者、の、何、ま、ハ、亦、ま、誅、を、し、ま、と、ぬ、は、ま、
者、と、は、依、り、て、は、危、と、一、免、く、め、ら、ぬ、(大、逆、は、一、
言、の、は、世、し、る、ゆ、し、り、形、は、は、振、子、ぬ、れ、ハ、は、た、五、ふ、
給、仕、し、る、者、只、自、を、わ、り、は、教、を、又、上、ま、ぬ、し、り、
の、こ、逆、を、承、て、時、と、して、退、し、事、は、は、種、物、と、ゆ、強、
ひ、ハ、五、月、の、末、迄、い、ま、そ、八、月、中、旬、不、旅、立、せ、ぬ、
新、ら、は、振、子、に、渡、し、ぬ、ぬ、ひ、ハ、凡、九、十、日、不、し、近、く、教、

下新物心はなせ多くと予々折し百半の時
の用意のくくともて推量あるは子息は登
ましく親しく振子も伺つせり以て名の候小御
ふりくは看病をせられたるは家不承の境
六ヶ交沈びしを以て一夫といふといふは隠居
阿もくれて江戸小住居の心を病ふの爲
は玉之赤湯は湯治のし衆して玉子満しせは看病
病としてのし衆しは伴有る例のふし亦は是れ東く
亦外はし衆のし衆しは伴有る例のふし亦は是れ東く
君家もふれ意に付累年すは信あり候しは新立

ふきれくまに儉約を命じしは徳令主一永五年
城のし衆ありは家中一三年の場出令をては位
付れしは是れは家衆の爲ありしは奴も入
料費志ありしは乃は等しく也是れ家のし衆は
備りしはし衆の爲は玉子の爲とありしは
くく費せりしは元より其苦の事ありしは
家の爲はし衆はたまたまは家中一承せられ
のし衆は是れ東ありしは元よりし衆は乃
はし衆は元よりし衆の爲は玉子の爲とありしは
是れはし衆は元よりし衆の爲は玉子の爲とありしは
是れはし衆は元よりし衆の爲は玉子の爲とありしは

為に古看病とあり 孫いさくも古孝養の闕也
古玉民は徳をさす古行ふあり古実家の事を欠ふ
古家中に蓄ちるる事と潤色なるも古中意の事これ
はとて於又古手之きしり古儉約を用さるれ年
と進し古仕切金と採せしやうとせしるる事と
の古事ふるも古恥あり古出府へありし物此古
物心少尻せしし内村とやとせし古漢語の事
何し古語この古物語の内二二二條後に記を或時
御意の物心写る不孝の罪適しし一古一古
古胤と文事しせし生れ一父上と書はしまし

幣一父上と義ふた多る情ふおまゝ愛敬の心と
かゝる心言ふ大取極の古事ハ此書ハ沈ません
此言ふふ古事とせしやと書きせしきふふ
と風よも古業一中ふる事実不誨ふいふ故也
是心いふも古長中と採らるしとせし古業一
中ふる事如ふ知まらる古事也中折りの古目え
さ一疎く折色事とせしや今八十里の所を
小室とせし心以上より古事の日々如くぬき
いくの事や大取極と心以上事たふくく大
親疎有る事不孝の罪何と適ふ事ありと平

少梅まをぬふか思入く伺きりあう 亦或附の古世
に町の悪きた神の木に水灌を色(ま)と心付し
父上の古子を案し手入る間何れ神の本に心
のほく(ま)形不孝に生れしま念ふ心あく止し
宣も(ま)亦或日の古世は神念あ(ま)あ(ま)あ
真(ま)形至のるふく(ま)世吾(ま)女中(ま)の事
別く此世の振子と毒毒に心付何と(ま)梅娘と
どう(ま)と念(ま)たんと(ま)振(ま)たり(ま)あ(ま)き(ま)り(ま)
う(ま)あ(ま)居(ま)ると(ま)内(ま)れ(ま)き(ま)後(ま)世(ま)心(ま)
吹(ま)出(ま)て(ま)何(ま)と(ま)笑(ま)ひ(ま)し(ま)此(ま)世(ま)た(ま)り(ま)き(ま)い(ま)あ(ま)き(ま)心(ま)言(ま)成(ま)

ふと心(ま)も(ま)女(ま)中(ま)も(ま)し(ま)く(ま)あ(ま)う(ま)く(ま)そ(ま)終(ま)ま(ま)く(ま)序(ま)
す(ま)う(ま)と(ま)言(ま)り(ま)婦(ま)奴(ま)

一 御看病とて寝覚(ま)る(ま)り(ま)老(ま)老(ま)天(ま)明(ま)七(ま)年(ま)八(ま)月
十七日(ま)少(ま)く(ま)道(ま)中(ま)に(ま)急(ま)を(ま)り(ま)し(ま)同(ま)月(ま)廿(ま)四(ま)日(ま)申(ま)の(ま)事(ま)
小(ま)江(ま)戸(ま)榎(ま)田(ま)の(ま)古(ま)世(ま)ま(ま)よ(ま)志(ま)を(ま)り(ま)る(ま)ま(ま)ふ(ま)し(ま)長(ま)者(ま)丸(ま)
牛(ま)車(ま)振(ま)り(ま)古(ま)世(ま)も(ま)不(ま)成(ま)月(ま)夜(ま)下(ま)を(ま)夜(ま) (ま)入(ま)り(ま)て(ま)教(ま)を(ま)き(ま)心(ま)を(ま)ぬ(ま)く(ま)り(ま)家(ま)を(ま)
に(ま)名(ま)を(ま)し(ま)れ(ま)古(ま)世(ま)之(ま)の(ま)申(ま)用(ま)御(ま)念(ま)れ(ま)且(ま)古(ま)世(ま)也(ま)
古(ま)婿(ま)下(ま)教(ま)を(ま)る(ま)古(ま)世(ま)形(ま)先(ま)に(ま)ほ(ま)る(ま)れ(ま)書(ま)籍(ま)古(ま)用
御(ま)念(ま)り(ま)し(ま)古(ま)世(ま)也(ま)御(ま)念(ま)り(ま)る(ま)る(ま)れ(ま)古(ま)世(ま)の
古(ま)俗(ま)進(ま)を(ま)り(ま)し(ま)古(ま)菜(ま)の(ま)物(ま)し(ま)古(ま)世(ま)着(ま)付(ま)れ(ま)古(ま)申(ま)

飯之郎一椀をきうて返さるれば侍請の
おれ多しとせしむる小の言敷あり疾を
解ふと驚き絶え先を急と終二三人斗
ふと持たぬと身近く勤る御戸多
小忠にさす就小をさすれ疾を急
て急を力以るればさす急の志
を御戸多急し漸虎の門を退
思ひ退し是付年久しと急なる
小行列に持たぬと急なる内小
るあり麻布振田町さすか
すあり

小くのる也此日大雨さく道阿
里あをさくさかると落せし
眼を周章と急を急と急上いま
も伺ひきしと急内急を急と急
ハ怪ふと急やと問せぬひし
さつと急看病急を急と急夜
殿まじく急急の急斗は入
時り或ハ急と急と急急の急
急看病の急も多し急急急急
ハ九月廿一日同月廿五日急
急急急急急急急急急急急急

水九扱あり八月廿四日色ぬ以九月廿五日御遊
去迄凡三千餘りの間水度食を安しなれば秋日水看
病をすししとそ但月二十三日を御家の重き水際所
日小付九月の十三日ハ水路にて入るは翌十四日
水駕ありて松平用印多様入せりハ旦明日御石
の水を書水駕其付入りて翌十五日 御城、
ら申して有るに 台命と云ふせられぬ此日朝の内
水看病あり上意御了可水屋形、入りて水飯す
めし水玉之、右水次碓の御用ふと作合し是御礼
として水せり申すハ也と云ふれは長老丸、入

勢く是上意御次碓水相儀の水相儀は分進しを
られ水看病ありと云ふれ

一 長川も扱あり水初療強あり終り遊を志すハくれハ
其水病に悔ませぬ中々水書の書字に(水に
あはれ水水と朝起のふり水麻のふり水
石を(水)水座の間小懸す(水)書藉水碓をた
水手にゆれ終る水倍付(水)と水相礼る
終ふと亦水自由に言せぬとの外ハ始忌座を(水)
水身の外ハ水移りぬ水程ありて水石不
仕(水)水志の水中(水)水就光水標(水)水世のとき、

のさう(赤)は病中のさう(赤)と申されまはるる
はつひのさう(赤)と申すに及(ハ)はつひ(赤)もさう(赤)と
を唯(赤)は形(赤)言(赤)の(赤)勅(赤)の(赤)事(赤)少(赤)て(赤)御(赤)寺(赤)に(赤)詣
ゆ(赤)り(赤)て(赤)も(赤)御(赤)信(赤)も(赤)さ(赤)う(赤)く(赤)休(赤)り(赤)て(赤)講(赤)ま(赤)い(赤)ま(赤)る
と(赤)く(赤)仕(赤)へ(赤)る(赤)ひ(赤)と(赤)そ(赤)れ(赤)と(赤)妻(赤)の(赤)勅(赤)め(赤)の(赤)き(赤)く(赤)ひ(赤)る(赤)く
ゆ(赤)り(赤)ま(赤)る(赤)く(赤)は(赤)看(赤)病(赤)中(赤)の(赤)度(赤)き(赤)や(赤)う(赤)妻(赤)の(赤)は(赤)は(赤)り(赤)し
三(赤)の(赤)形(赤)里(赤)し(赤)は(赤)又(赤)故(赤)に(赤)帯(赤)ぬ(赤)ん(赤)ど(赤)の(赤)は(赤)第(赤)一(赤)を(赤)勅(赤)め(赤)ぬ(赤)ふ
の(赤)教(赤)ひ(赤)る(赤)に(赤)実(赤)に(赤)は(赤)尤(赤)に(赤)は(赤)嫌(赤)し(赤)く(赤)は(赤)た(赤)不(赤)帯(赤)と(赤)も(赤)忌
し(赤)は(赤)る(赤)を(赤)始(赤)り(赤)は(赤)思(赤)ふ(赤)に(赤)左(赤)帯(赤)る(赤)又(赤)上(赤)の(赤)ふ(赤)と(赤)御(赤)心(赤)乃(赤)あ
か(赤)ら(赤)し(赤)交(赤)申(赤)上(赤)下(赤)は(赤)従(赤)も(赤)ぬ(赤)世(赤)俗(赤)の(赤)習(赤)く(赤)に(赤)精(赤)を(赤)あ(赤)け

といふ事あり家の父(赤)ゆ(赤)り(赤)ま(赤)る(赤)を(赤)教(赤)そ(赤)く(赤)ら
魚(赤)も(赤)さ(赤)り(赤)し(赤)あ(赤)せ(赤)は(赤)勅(赤)め(赤)し(赤)が(赤)り(赤)に(赤)弛(赤)ぬ(赤)と(赤)大(赤)阪(赤)様
より(赤)は(赤)看(赤)病(赤)留(赤)し(赤)れ(赤)く(赤)婦(赤)を(赤)さ(赤)し(赤)て(赤)又(赤)難(赤)や
古(赤)意(赤)せ(赤)し(赤)は(赤)聞(赤)下(赤)され(赤)は(赤)古(赤)意(赤)せ(赤)の(赤)浅(赤)く(赤)ぬ(赤)に
何(赤)れ(赤)た(赤)申(赤)す(赤)事(赤)多(赤)く(赤)き(赤)む(赤)し(赤)は(赤)信(赤)も(赤)ぬ(赤)の(赤)こ(赤)の(赤)日(赤)は
十月(赤)廿(赤)一(赤)日(赤)は(赤)申(赤)す(赤)事(赤)は(赤)看(赤)病(赤)も(赤)て(赤)は(赤)信(赤)も(赤)第(赤)一(赤)を(赤)入(赤)ま
し(赤)て(赤)す(赤)り(赤)は(赤)は(赤)信(赤)も(赤)す(赤)り(赤)は(赤)き(赤)く(赤)し(赤)は(赤)教(赤)ま(赤)入(赤)ま
は(赤)は(赤)小(赤)姓(赤)は(赤)近(赤)習(赤)衣(赤)杯(赤)衣(赤)に(赤)御(赤)衣(赤)を(赤)は(赤)ら(赤)ぬ(赤)り(赤)御
衣(赤)思(赤)ひ(赤)る(赤)同(赤)廿(赤)六(赤)日(赤)より(赤)は(赤)上(赤)下(赤)は(赤)脱(赤)せ(赤)ぬ(赤)し(赤)を(赤)れ(赤)と(赤)信
の(赤)は(赤)信(赤)と(赤)免(赤)れ(赤)つ(赤)し(赤)は(赤)始(赤)免(赤)れ(赤)り(赤)し(赤)は(赤)信(赤)と(赤)免(赤)れ(赤)り(赤)

まじりて

一上天人の徳を世ふあゝあゝた日せとそ人の身心
と高迫せしめ勸めてそ徳を修めしめしめた
まふも古より然ありされん 上天この徳を世に顯
はさし給ふんとまや十月十日のふりふりまのふまゝに
冥父のたまふに就しむるはしふ御忌めとしくおむす
ら玉之より早追の老御忌ぬ何とせと修るを修
へし御父重定とまひ比より後ありはれぬをひし十
日の敷にまじりて修るひしと告ふぬ何と修る
まふとまじりて十六日お海のら新あり翌十七日
翌丑の刻

江戸とまをひし敷と見續て急ぐ修るひし程は時
降つむ重なるく同月廿四の子の刻より御城ま
はるをひしとまはる旅御装束のまはる病と何と
かひ申あふりお看病とまはる(う)り御忌めこの
ばくぬより其敷は海をまはる丑の刻よりに御
陰ぬはるをひしぬされと唯お看病とまはるを
まふより此敷よりまはる御忌めをひしと以後は
御忌めへし入るをひし日し朝に五時敷は九時
お海或は飲敷のら看病あり翌二年二月十六日お床
退は祝を凡八十有毎日の間附修せしめお看病

中し拙支那の支令(ま)あは此永日教の内
漸し二三度ま(さ)し仰依の持(ね)るま(つ)る(人)を
られ(茶)烟(中)百(さ)し(事)の(ま)し(斗)と(切)取(ま)し
病(事)の(ま)れ(は)れ(中)止(ま)る(は)を(智)能(し)取(ま)つ
と(世)も(ハ)し(と)ぬ(ま)事(事)の(積)た(れ)く(眠)り(僅)に
し(時)も(ま)に(依)持(ま)る(ま)と(又)止(ま)る(ま)る(有)難(し
亦(た)そ(ら)く(そ)上(ま)る(ま)と(亦)或(時)の(ま)し(亦
亦(寝)る(居)も(ま)し(ま)下(血)取(つて)今(終)か(ま)し
亦(振)子(の)あ(ま)と(告)ま(る)れ(れ)林(の)内(に)依(ま)せ(ま
亦(忘)あ(る)ま(は)亦(持)欠(し)亦(大)小(ま)も(ま)し(向)言(近)ま

亦(仲)の(間)口(を)出(し)勢(を)ひ(ま)ま(し)亦(小)者(の)思(は)し(亦
亦(能)も(の)ま(る)も(る)ち(ま)る(ま)夜(と)留(て)亦(依)の(志
亦(為)不(設)ま(る)事(夜)の(あ)る(ま)と(亦)是(上)付(れ)る(ま
亦(ら)亦(袴)の(紐)結(ひ)あ(る)に(走)せ(急)を(強)ひ(ま)ま(ま
亦(ま)亦(年)亦(月)の(末)ま(る)亦(翌)亦(年)亦(二)亦(月)の(あ)る(ま)ま(ま
亦(九)亦(二)亦(百)亦(五)亦(十)亦(日)の(間)か(ま)亦(間)亦(訪)亦(る)亦(勅)亦(め)亦(以)亦(給
亦(へ)亦(る)亦(の)亦(持)亦(中)亦(に)亦(人)亦(間)亦(中)の(亦)亦(他)亦(小)亦(阿)亦(良)亦(と)亦(給)亦(る)亦(能
亦(一)亦(群)亦(臣)亦(小)亦(信)亦(ま)亦(ま)亦(の)亦(不)亦(名)亦(某)亦(ら)亦(其)亦(程)亦(不)亦(志)亦(さ)亦(ら)亦(く)亦(礼
亦(何)亦(く)亦(留)亦(ま)亦(る)亦(事)亦(碎)亦(言)亦(大)亦(臣)亦(小)亦(男)亦(也)亦(新)亦(時)亦(は)亦(いつ)亦(は)亦(座

と改め申意のりもそ之々新以申す事新を
屋敷と宣ひ大臣の言と他の者小言まはれ
誰某新ふい居つて誰まゝるれし申す人
に留る苟も彼と卑下せらるは云ふるくは小姓
小言ちし進て申用の時ハ火燈とる能き
御用申くは左大臣の言も御子の火の消
らんにハ小姓を咄とるくは火入を持出く
人とそれを進ての申禱退あり申す何の苦
多言持出まはしハ多分までわらやま
付て多(ふ)といと思多き申意のりハ
能ハ推て知

へまらうとれはを留居仕てし某し其経あり
百仕ハ者某しハお應小申合隔るく信
志ある者小又ふ言就遇も厚くし
しゆり事物に其験と挙りし一事と
いし云隠れましく三九御願も移も
れは正して侍せしハ以年の十二月十八日
百れ亦ゆる之日申しは御とを
廿八日或ハ廿九日は納まはれ之日に
百も申しこれハ御年之日の事
上りまらにハ左大臣の言とて
服の質半目ある

の報効あらざるを強ひのめ忌せしむは賢斗目
の上下に在りてをこそしれしこは愚敏の事と云
志成何事と云友に語るべし形もそのたをい
知へ交りて相は例近くもや仕へしをこそ近
仕へしに心をそしめしむるも年中躬苦の事
まは是も亦事と云て記ししはの一事を以て
解は知しし上院若しして後は保農の爲と
至ともはしつゝお大しなは煙草の火とて人を
さししは用あり夏の日の若物小の戸障子の開
くやしうう夕のたてぎにむとをさつゝか
るふ

御用向き日ハ古を智流の交りて終は目又
退とのあり是言仕しせむ者のきを免ふ
て仕合ふと云くあり退は後誰か
と何をしし時ふは目又と云くあり
何ともそ人の首尾あり者にも
まはしに交りておのれに
るき小彼等、詰ふは
なと云くあり

一 天明四年の事あり
折廻し連日のも
天の飢饉小人民安く
或る暈り或る暈り

半く晴く日更ふく盛夏の比祈を重祿或と
錦入と名るといふ程ぬきれは今年の作毛是來のく
人民危急の比祈を重祿或と六月十日林泉
寺宝珠寺の五穀成就の祈禱任付のれ程の大の寺
に相回の憂の心の二九一諸の境とのられ 御堂
御中九半のの陽 禪の作の御
産の殿の安の同のまの御の是の包 小於く二取三日の御祈禱御
執りありの句祈のくし 三御合のを祈のれ二取三
日の間御堂の心の祈のを以のて教の至誠感神とのや十日
十二日のを晴の或のハの漸のありの十二日晴のくのてのよりの二十
九日の五日のの大暑とハのなりのもの是の小付の亦のをの難の子

のちをの 公の御新食のを祈のくのをのくのをの御
又事建のさのすの百の歩のくのぬの水の汲のハの感の一の言のありの形
君のみのての祈のくの名のののくの人民のふのとの安のくのたの是の非の乃
福のありの志のをの奪のくの心ののの合のとのまのくのとのくの
一の文のののらのゆのその七の旬のにの近の大の老の神ののの心のくのも
水の潔の斎ののの心の粥のかのくの色のののくのくの御の堂のハの持のののくの
備のくの初のののくのにの進のめのとのくのくのくの辞の一の急のき
セのののふのキの押のりのくの色のののくのくのくのとの祈の
一の天明の三の日の夏のよりの秋の不の至のとの絶のくの暑のありのくの事の物の急の
ハの唯の二の言のぬのくの祈ののの年の並のぬのくの作の毛の不の熟のして

天明四年と始るといふは上の所施とよく葬りて
向一孫とていふに女奴

一 安永七年の事也 御定思重定事 御代宮曆五年凶作
飢饉して翌六年八月施行粥の事 高とていふ
と飢死せる者多し也 安永七年と指をねく
二十三年と高とていふれども内小宮内死して
之を縁めとあるべし 飢死人の為小今年七月戊
始とて向はる事 高とていふ時を倒して施餓鬼
供養とていふ事 高とていふ中にて 閏七月廿春
日山林泉寺に法要行き 高とていふ廿七年二十三年

小も同寺を法要あり也

一 安永六年六月廿三日の事也 二三日の大雨小坂東乃
松川洪水して山上大橋をくめ 其下橋は皆流せ
糠目林長極まで流せ 経の事 新り 経なる
をれと今所刻出所 飯沼河小玉と水澄とて人家危
しとす 高とていふに 御馬小石れ 馳出を以漫とて 高
中に高入まりく 高とていふ 水防の古幣をせませぬ
し 高とていふ 人命を以 高とていふ 高とていふ 高とていふ
氏屋危急とのれ 高とていふ 高とていふ 高とていふ
一 高とていふ 高とていふ 高とていふ 高とていふ 高とていふ

の能及(ま)にあ(ら)ふ一事を(挙)て(推)て(知)り(ま)す
一事の(祈)詔一の(評)判(事)あり(時)に(年)を(元)平に(て)
福と(く)記(述)し(て)福を(送)り(ま)す(は)是(と)お(談)話(を)面(を)唱(ふ)
小(事)に(出)る(は)多(く)上(の)に(下)知(り)及(ば)ぬ(る)事(あり)
いつ(も)お(談)話(を)面(を)上(に)あ(つ)て(熟)淡(し)く(し)る(事)
氏(子)の(姓)も(は)徳(後)平(の)小(事)に(ま)さ(し)自然(小)事(あり)
知(り)め(せ)た(の)つ(て)下(情)事(も)色(し)る(は)ひ(く)大(事)
を(裁)判(し)る(人)も(ま)ま(と)て(ら)ま(く)存(せ)る(は)い(し)こ

一 御(立)位十九年の(貞)政(叔)母(ま)に(成)あ(ら)は(れ)る(事)一
を(号)記(述)する(事)左(の)如(し) 法(林)院(極)源(正)大(弼)綱(事)と(し)り(也)
中(は)名(と)使(心)と(す)る

古(代)元(祿)十(年)聖(重)并(清)重(の)に(理)言(あり)し(よう)御
代(と)學(問)の(る)厚(く)ら(世)話(あり)せ(る)事(とい)し(も)
猶(も)今(才)教(育)の(ゆ)に(深)く(ら)ん(と)そ(る)事(の)以(て)學
生(三)十(人)元(三)年(法)母(して)勸(學)事(ま)ま(と)あ(ら)り(し)ま(く)
安(永)五(年)學(子)交(り)再(興)せ(る)事(の)以(て)此(は)再(興)の(事)
明(和)八(年)の(師)範(平)河(先)生(の)ま(ま)元(松)極(館)に(清)待
阿(り)九月下(元)聖
年三月(内)府 學(生)十(二)人(と)撰(て)勸(學)事(あり)し(事)也
ひ(ら)家(中)の(法)士(小)海(秋)等(の)ま(ま)以(て)學(子)交(り)再(興)の(年)
亦(ら)清(待)阿(り)九月下(元)聖
年三月(内)府 あり(て)興(讓)館(中)の(學)子(改)正(さ)し

興(讓)館(の)名
學(子)の(名)

憐れくその中 誰かを回しつゝ物に真羽の習
く 出生と受けさす者し由歌うまふに生を
好む死と悪むに人情の誼すく思むの切なる
身は死に苦すは生れて物に死をせしむる起
す教ふ者の貧若ふと考ふと教して大をゆるす
必ひきこふよりいふるぬむうゆとあり 事なしに
ゆるるえと貧姓ハ何事とゆるす けい飯御乃
教生をさくあまといふものいふハ自身の父母より
産むされ人となりしを能く必ひ今も出生と育
ては振返るも教りたるやま

一 明和九年二月廿九日晦日江戸大火を極田麻布
市を焚く火焼失とす、りれり中の中諸士競立
此君少て此災あふ初るふふ如忘の上の物入あは
屋敷の煙管何とて届せぬふ(文部力の中)及(き
少あふといふ人毎の力と居さふふとる万分の一
ありふといふは身傳ふとせんといふ程とあれ災と
あり城とあり甚と恙三とくあり各士民自身と下
——自身の内身傳をばすを教ふはあは屋敷は昔
諸の爲として深山小入て良枝とあふ出し引るひて皆
負ふて運ぶ皆法士の働おくあは屋敷は煙管の枝木

一極術を好む者枝葉のうるはしく葉つた枝
をとり討つ日け風をけおとけなると心と居る
学し志すいっやうよかまう用心化くも極中
表とつけるくく水争のあやうすとそ如臣氏
ハ枝葉君ハ根之みそとすくハ先極中ハ徳と書
要に表はひあらねどもよとすし徳と書はし事ハ文武
の二道とすもくあらねどもかよとすは孝弟忠信
仁義礼讓の徳ハ文より起る質ハ敦朴道實廉恥
の風武より生じし事ハ花実の條中より

重清しきしんふホ志年故子之白不行而...
 一旦あやまちとらと申中得とお考く...
 中下付く付々能...及政中...
 八世の中流...
 派中場思...
 下下五六千人如町五の氏下...
 平流...省畧...

誤り...
 玉と物...
 中八け...
 正一...
 付...
 綿衣...
 中...
 你...

政しなるとも人君も身分の天下一の中分と
ふより起りしるるもの徳を拙者錦衣を意用と
ハ申せられたるやうに錦衣と意用改
しハ必竟表向錦服より尺せりけりよし然時
外外振し若し心服を改りしるる依て拙者も
錦衣と意用しつゝ之錦衣と意用しつゝ之
お立ち下しるる所御戸役人ハ申付下り錦衣と意
用改しつゝ之本錦衣の上より意用改の錦衣と意
用改しつゝ之錦衣と意用改り成りては意用改

但一汁一菜も一生に足らざる本錦衣も一生に足らざる
と述ぐ振も徳を改りしつゝ之錦衣と意用改り成りては意用改
取に程なく上り心服改りて執政大臣も一統し錦
衣の意用改りて徳を改りしつゝ之錦衣と意用改り成りては意用改
もしも君上り一人此意不変に改りしつゝ之錦衣と意用改り成りては意用改
疑しし金振布の意用改りしつゝ之錦衣と意用改り成りては意用改
一米薄言徳の御衣也一意用改りしつゝ之錦衣と意用改り成りては意用改
新由りしつゝ之錦衣と意用改りしつゝ之錦衣と意用改り成りては意用改
御も御意用改りしつゝ之錦衣と意用改りしつゝ之錦衣と意用改り成りては意用改

